

5月25日(金) 11:20~12:00 九州大学50周年記念講堂

---

## 台湾の「日本画家」

—陳進《サンティモン社の女》をめぐって—

福岡アジア美術館 ラワンチャイクン 寿子  
RAWANCHAIKUL Toshiko

---

陳進作《サンティモン社の女》(1936年、福岡アジア美術館所蔵)は、昭和11年(1936)秋の文展鑑査展に入選した画家の代表作ともいべき優品である。展覧会後、目黒雅叙園に収蔵されたが、戦後は日本でも台湾でもその存在が知られることもなく、近年再発見された。そのため先行研究としては、児島薰氏が陳進の作品評価をめぐる考察でとりあげ、内地でプロとして歩み出した画家が自らの原点をみつめことになった作品である可能性を示唆的に述べているにすぎない。そこで本発表では、作品を詳細に検討し、それを通じて日本統治下の台湾を代表する女性「日本画家」の制作の実情とその課題を具体的に考察し、日本の植民地における美術活動の一端を明らかにする。同時に、本作に投影された陳進のアイデンティティの複雑さや政治性について考察し、さらには台湾独自の画壇の形成につくした陳進の独自性に言及したい。

陳進は、1907年に日本統治下の台湾に生まれた。日本への同化がすすめられた時代に親日派の裕福な家庭に育ち、福建語と漢文化を身につける一方で、日本語と日本の教養を身につけた模範的な台湾籍「日本人」でもあった。1925年に女子美術学校日本画科高等師範科に入学し、在学中から台湾美術展覧会(台展)に入選して注目され、1932年からは同展の審査員を務め、1934年には第15回帝展に台湾の「日本画家」として初入選を果たしている。なお当時、日本画は台湾で東洋画に分類され、帝展の日本画部に当たる東洋画部が台展に設けられていた。

本作は、陳進が高雄州立屏東高等女学校に在職中、同地の先住民の集落サンティモン社に取材して制作したものである。母子を中心に左右に年配の女と2人の少女を緊密な関係で配置した厳かな雰囲気をもつ作品で、民族服の女たちからは台湾らしい「地方色」もただよう。発表では、まず陳進が遺した写真や下絵から本作の制作過程をたどり、画家が現実をどのように改変したかを考察し、次に日本人の先住民観が本作にどのような形で反映されているかを検証する。その上で、日本統治下の台湾で先住民の題材がもつ意味を考え、本作を他作家の同主題の作品や陳進の他主題の作品と比較し、本作の先住民表象が抱える問題を指摘する。最後に、陳進の言う「郷土美」を手がかりに、成熟した氣品のある女性表現、エキゾチックな南国イメージの抑制、厳肅な画趣など表現の特色に着目し、その意味を考える。以上を通して、日本・台湾・漢民族・先住民をめぐる複雑なアイデンティティの問題や宗主国と植民地の関係性、植民地の女性が先住民女性を描いて文展に送る意味などを考慮しつつ本作を多面的に解釈し、その内包する意味の豊かさと独自性を明らかにしたい。